

「ポリオの最新情報」

私は小児科医ですが、実際に急性期のポリオ患者を診たことはありません。

私が子どもの頃、昭和30年代には日本でポリオが大流行しました。その頃ポリオに罹り、手足の麻痺を持った患者さんを診たことがあります。その間に何があったかという、ポリオの生ワクチンのおかげで、日本はポリオが根絶された状況になったのです。

WHOは1980年に天然痘根絶宣言を出しました。

天然痘根絶の成功に後押しされ、1988年の世界保健会議で次の目標としてポリオ根絶計画を立てたのです。日本などの経験から、ポリオ生ワクチンの接種で2000年までに根絶は可能だと楽観的に考えられていて、1990年から国際ロータリーもこの計画に参加しました。

ところが予想を裏切り、2000年になってもインドの感染は収まらず、多くの資源投資と努力にもかかわらず、数千人規模の感染が続きました。感染が続く原因の一つは、実は人口の1割を占めるイスラム教徒のヒンズー政権に対する反発とポリオワクチンを飲むと子どもができなくなるというデマでした。異宗教間の不信感に発するワクチン拒否は世界で現在も問題になっています。

2010年代までにインドの感染は終息に向い始め、野生株はパキスタン、アフガニスタン、ナイジェリアに残るのみとなり、ポリオ根絶も間近に思えました。しかし、この頃から無害であったはずの弱毒生ワクチンが、ワクチンを受けていない子どもに伝搬し、お腹の中で増えて、子どもへの伝搬をくり返す中で、再び病原性をもったウイルスに変異していく、いわゆる「変異株」が出てきたと多く報告されるようになりました。ワクチン株が子どものお腹の中で増えるときに一部のウイルスが先祖返りをして毒性を持つようになったと考えられています。ワクチンで、ウイルスを根絶したいのですが、ワクチンを使うことで変異した株が出てきて、それが新たな感染の元になってきたのです。まさに、イタチごっこの様相になりました。

日本を含めた欧米先進国はこれに対応すべく、すぐに経口の弱毒生ワクチンの使用を止めて、注射による不活化ワクチンの定期接種に切り替えました。では、途上国もそうすればいいのではないかと思われるかもしれませんが、しかし、注射の不活化ワクチンは生ワクチンの10倍以上かかり、注射器や人材などの莫大な医療資源も必要になります。さらに、接種回数も生ワクチンよりも多く必要になります。これでは、世界の人口の2/3を占める途上国をサポートすることは不可能です。このままでは、いつまでたってもポリオの根絶は見えてきません。

以上のことから、ポリオ根絶は失敗したのでしょうか。

それとも、ポリオ根絶は、途上国全てが先進各国と同様に注射の不活化ワクチンに完全に變更して使えるようになるまで待つしかないのでしょうか。いつになるか分かりません。実は今、WHOが連携する科学者たちは変異する確率の少ない新たな弱毒生ワクチンを作り出し、これを新たな武器としようとして、臨床試験に入っています。

新型コロナウイルス感染症の対応で、ポリオ根絶の動きが見えにくくなってしまいましたが、ポリオ根絶のために今もWHO、科学者、ワクチン会社、もちろん国際ロータリーもたゆまぬ努力をしていることを知っていただければ幸いです。

